

茶業必要

下

內閣文庫		
八三函	七三九六號	和書類
七架	二冊	

太政官文庫		
二冊	七三九六號	和書門

內閣文庫		
番號	和	7396
冊數	2	(2)
函號	183	324

茶綿



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



茶業必要下卷

茶業必要下卷

上林熊次郎 編述

明治十年游記

第五條 製茶ハ時ノ好尚ヲ詳ニス可キ

事 天下ノ至寶モ人棄テ之ヲ顧ミサルハ塵芥ト

倫等クス山野ノ微物モ人好ラ之ヲ求ルキハ

金玉ト伍ヲ同クス物ノ賤賤ハ人ノ需用ノ多寡

ニ由テ定ムルナリ今各國ノ中ニ茶ヲ産スルノ地ハ日本支那印度爪哇等ノ地ニ過キス而シテ印

度爪哇ノ茶ハ其種子ヲ支那ト日本トニ求メテ
大ニ種栽ノ力ヲ勞シ僅ニ蕃盛ノ途ニ赴キタル
モノナリ然ルニ茶ヲ嗜好スルハ世界萬國民俗
ノ文野ヲ論セス皆之ヲ欲セサルハ無シ是ヲ以
テ今産茶ノ地ヨリ一歳ノ輸出スル所大概二億
四千萬餘斤而シ未タ四隅ノ望ニ充ルヲ得ザ
ルナリ大凡地球ノ人員十億餘ナリ一人ノ飲
料一年一斤トスルモ猶十億ノ斤數ニ至ラサレ
ハ其用ニ適シ難シ况ヤ一斤ノ茶ヲ以テ一年ヲ
支フ可キモノニアラサルヲヤ然ルキハ今地球

上ノ茶ハ未タ地球上ノ用ニ充ツルヲ能ワサル
ヤ遠シト謂可シ然ルニ我國産出ノ茶其販賣ノ
道時ニ滯滞有ルヲ免レサルハ何ゾヤ蓋シ之
ヲ製スル人、時世ノ好尚スル所ヲ詳ニセサルヲ
以テナリ今ヤ製茶ノ類別數種ナリ支那ニハ則
支那本色ノ茶及ヒ輸出綠茶、烏龍茶、紅茶、青茶、黃
茶、磚茶等ノ製有リ我國ニハ則薄茶、濃茶、及煎茶
輸出日本本色茶、釜熬茶、日乾茶、半天茶等ノ製有
リ然レモ孰レカ貴孰レカ賤タルヲハ一方ノ心
思ヲ以テ定メ難シ但世界人民ノ需求多キ所ノ

品ヲ主トシテ製出スルノ外豈他有ランヤ而ソ
其主トシテ之ヲ製シテ人好テ之ヲ需求シ販賣
ノ道澁滯セサルモノ則其時ノ上位ヲ占ルノ品
ト云可シ然ラハ則今世ノ上位ヲ占ルノ品ハ何
ゾ曰ク紅茶是レ也一モ紅茶ノ上頭ニ出ルモノ
有ル可ラス何トナレハ紅茶ノ需用ハ各國ニ巨
テ廣クシテ綠茶ノ米利堅一國ノ人民ノミニ適
スルカ如クナラサレハナリ
石河多田兩氏ノ記ニ曰今一般嗜茶ノ景況ヲ
視ルニ支那ニ於テ製成スル所各種有リト雖

モ洋人ノ嗜ム所ノ者ハ唯紅綠ノ二種其他我
國輸出茶ナリ此ノ全量ヲ概算スルニ二億四
千万余斤ナリ是レヲ百分ニシテ其多寡ヲ算
スレハ紅茶ハ七十分即チ一億六千万斤綠茶
ハ二十二分即チ五千二百八十万斤ナリ我製
ハ只八分ニシテ即チ一千九百二十万斤ナラ
ン而メ其嗜好者特リ北米國ニ在ルノミ今此
ノ僅々タル嗜好者ヲ目的トシテ夥多ノ産ヲ
起スハ意フニ無稽ノ理ナラン若シ強ヒテ起
サントスレハ必ス多キヲ以テ賤ムノ理ニ陷

ルモノナラン此ノ概算ニ因リ一般所嗜ニ從
ヒ紅茶ヲ精巧ニ製成シ以テ大産ヲ起ス
務ト奉存候此起産ノ基ハ唯衆ノ好ム所ニ隨
テ其製ヲ巧ニスルニアリ如何トナレハ茶ハ
原支那ニ起リテ今各國ニ及フ英國ノ如キモ
其始メハ支那ニ於テ製成スル所ノ粗惡ノ茶
或ハ磚茶ヲ以テ上好トナセシカ方今ニ至リ
テハ極メテ精製ニアラサレハ嗜好スル者ナ
キニ至ル諸餘ノ各國亦然リ是レ應時起産ノ
要務ニシテ特ニ紅茶ノミニアラス我輸出茶

ノ如キハ最モ缺ク可ラサルノ大事ナリ然ル
ニ賸味ノ野人ハ此ノ眞理ヲ知ラス粗惡ノ多
量ヲ以テ善價ヲ得ンコトヲ欲シ終ニ爲ニ折資
破産ヲ招クニ至ル凡ソ粗惡ナルモノハ其價
必ス其費ニ酬答セサルノ眞理ニ深ク意ヲ注
スキ而シテ其鴻産ヲ起スノ基ヲ根定仕度儀ニ
候
是レ則兩氏カ印度ノ茶業ヲ親シク目撃シテ熟
慮スル所也大ニ方今ノ事情ニ切ナリト謂可シ
覽者庶幾クハ前ニ説ク所ノ者ヲ以テ空漠ニ付

セス彼此相照ラシテ俾産ヲ起ス可キナリ
第六條 茶園ハ廣大ナ便利トスル事
上文ニ所謂各地輸出ノ製茶二億四千万余斤其
數量大ナリト云フ可シ然レモ世界人民ノ多キ
未タ其需用ノ十分ノ一ニ至ラサルモノニ似タ
リ是ヲ以テ歐洲人ノ茶ニ注意スル深切ニシテ
且ツ遠大ナリ我國人民ノ一二頃ノ園ニ種裁シ
テ既ニ廣大ナリトシテ一時茶價ノ低落ヲ見テ
ハ愕然トシテ之ヲ廢棄セント欲スルノ比ニア
ラヌ

多田石河兩氏ノ記ニ云裁茶ノ地方ハ絶域ノ
山中ト雖モ道路ヲ通シテ運輸ノ便利ヲ開キ
千辛万苦シテ人民ヲ奨勵セシニ幸ニシテ其
茶ノ香味支那茶ニ卓越シ從テ其價騰貴ナル
故ニ衆競テ此業ヲ起セシト云フ今僅ニ其進
歩ノ一例ヲ舉ムニ去ル壹千八百七十三年喜
馬拉山中ダルセーリンニ於テハ僅ニ八十七
園ナリシニ同ク四年ニ至リテハ已テニ壹百
十三園其地壹万八千八百八十八エークルニ
至ル(即チ我八千八百町步余ニ當ル)他ニ於ケ

ルモ亦此ノ如シ此ノ兩年比較スルニ増ス
 二十六園ニ至ル又此四箇年間輸出ノ多寡ヲ
 比較スルニ一千八百七十二年第十月一日ヨ
 リ翌七十三年九月三十日ニ至ルノ間ヲ以テ
 英國へ運送ノ茶計壹千八百〇八万二千三百
 七十磅同年十月一日ヨリ翌七十四年九月三
 十日ニ至リ其計壹千八百八十四万壹千壹百
 三十九磅也同年十月一日ヨリ翌七十五年九
 月三十日ニ至リ其計二千二百九十九万八千
 〇三十八磅此一歳更ニ増ヌテ四百十五万六

千九百〇九磅ナリ同年十月一日ヨリ翌七十
 六年九月三十日ニ至リ其計二千六百九十壹
 万九千七百三十三磅此一年更ニ増ヌテ三百
 六十二万壹千六百九十五磅也此僅ニ三ヶ年
 間ニシテ其増加スル處其計八百五十三万七
 千四百三十六磅ニ至ル年々種茶者ノ多キ
 斯ノ如ク盛ナリ今視ル所尙逐年増ス可キノ
 景況ナリ
 彼國ノ茶園ナルモノハ英國ノ人民夥多ノ
 資本ヲ募リ社ヲ結ビ或ハ獨立ヲ以テ一所數

百千エークルノ大園ヲ開キ土人ヲ使役シテ
終歲製茶ニ從事スルノ方法ヲ設立シ或ハ機
械ヲ構テ人工ヲ助ケ競テ其製整ヲ精巧ニス
云々下畧
園地廣大ナレハ萬般ノ事大ニ便要ヲ得易シ彼
ノ英人蘭人ノ如キ地ニ一株ノ茶樹無ク遠ク種
子ヲ海外ニ求メ播種栽培精巧ヲ極メ至ラサル
所無ク漸ク以テ各地ニ涉リ今日ニ至テ印度ノ
如キハ實ニ蕃茂盛大ト云フ可シ而ノ其園廣大
ナルカ故ニ機械及ヒ運輸ノ便ヲ開クヲ得タ

ルナリ僅々ノ園隔處ニ散布スルキハ萬般ノ費
用必ス倍蓰ス安ソ機械及運輸ノ便ヲ大ニ備ク
ヲ得ンヤ我國ハ風土能ク茶樹ニ適シ播種栽
培共ニ力ヲ爲シ易ク其勞其費彼レカ半ニシテ
功ハ必ス之ニ過ク可シ只着眼スル所彼レニ及
ハサルカ爲メニ近歲僅ニ茶ヲ栽スル者有レモ
既ニ餘リ有ルカト疑フ者無キニ非ス偶大ニ業
ヲ起サント欲スル者モ宇治ノ方法ニ從ワント
スルカ故ニ資用給セス加之各會社ノ如キモ切
近ノ利ヲ謀ルニ急ニシテ遠大ノ利ヲ慮ラサル

者多キヲ以テ此ノ業未タ盛大ノ運ニ向ワサル
ハ惜シム可キヲナラスヤ又
石河多田兩氏ノ記ニ云栽茶製茶ノ業ヲ以テ
生理トナシ之ヲ國外へ輸出スルノ地方ハ支
那印度ノミニシテ其他ニ無之唯僅ニ種茶ノ
業ヲ起セシ者ハ和蘭領爪哇ナリ此地種茶ノ
起原ハ彼ノ一千八百二十七年始メテ五百本
ノ茶樹ヲ我日本國ヨリ齎シ歸リ「ブリーンゼ
ル」ナル官園中各部ニ移植シ其後一千八百三
十三年支那ヨリ巨多ノ種子及ヒ數多ノ工夫

ヲ「ブリーンゼル」州ニ移シ燒心焦慮非常ノ力
ヲ盡シ紅絲ノ二種ヲ製シ人民ヲ獎勵セシト
雖モ未タ本國和蘭ノ飲料ニ充ルニ足ラザル
ノ景況ナリ
此ノ記ヲ以テ考レハ益各國ノ茶ヲ懇望スル
切ニシテ而シ其品甚タ乏シキヲ見ルニ足レリ
故我國斯ノ如ク茶ニ富テ却テ微々タル成業ニ
安ンス可ラサルハ斷シテ明カナリ是ヲ以テ同
志相合シ同保相結ヒ其地ヲ相シ宏園ヲ拓キ簡
ニ就キ便ヲ考ヘ播種栽培ノ力ヲ施サハ蕃盛歳

月ニ新々ニシテ民人ノ段富國家ノ豐饒之ニ因
 テ見ル可シ然リト雖モ今半畝ノ園一株ノ茶モ
 各其分ニ應シテ其利無キニアラサルヲ以テ小
 ナリトシテ蔑棄ス可ラス
 第七條 茶ノ價格ヲ知ル可キ事
 大凡物ニハ價位ノ大格有リ其大格ノ價位ヲ知
 ラサレハ之ヲ産製シ之ヲ運輸スルノ目的ヲ定
 ヲ難シ然ルニ物價ノ低昂ハ常ナラス變替極リ
 無シト雖其價格中ニ於テ昂低ヲ爲スノミニシ
 テ價位ノ大格ヲ變スルハ蓋鮮シ但時變ニ因テ

其價位ノ大格ヲ變スル有レト一年ノ凶荒ニ
 テ穀價騰貴シ一旦ノ價乏ニテ物價不廉ナルハ
 價格ノ變シタルニ非ス久シカラステ必ス本
 ニ復ス可キナリ世移リ時變シテ人ノ好尚スル
 所更マルキハ則價位ノ大格ヲ變ス又疏通開鑿
 ナ以テ新ニ運輸ノ便ヲ得ルノ地ハ亦必ス價格
 ナ變ス價位ノ大變革ト價格中ノ小昂低ハ辨知
 セサル可ラス今人材ノ給祿ヲ以テ之ヲ比喩セ
 シ昔日ハ人ヲ舉ルニ年祿ヲ以テス故ニ幾万石
 幾千百石ヲ以テ價位ヲ定ム今八月給ヲ以テス

故ニ幾百圓幾十圓ヲ以テ價位ヲ定ム是ヲ以テ
其聲呼ハ懸カニ殊ナリト雖モ其實ハ大ニ異ナ
ルヲ無シ則價格ノ變革ニハアラス上云可シ又
万石ヲ得可キ人ニ百石ヲ與ヘテ之ヲ舉ケ四百
圓ヲ給ス可キ人ニ四十圓ヲ與ヘテ之ヲ舉用ス
ルハ購人モ售人モ皆其價格ヲ知ラサルモノ
ト云可シ又其人ノ戈識當時ノ事務ニ的切ナル
ハ万石ノ價位ノ人ニ万二三千石ヲ増與シテ
之ヲ登庸シ其才識未タ時用ニ充ツルニ急切ナ
ラサルハ四百圓ノ價位ノ人ニ二三百圓ヲ與

ヘテ之ヲ優待スルハ是レ皆價格中ノ昂低ナリ
又昔時爭亂ノ世ニテハ膂力武技有ル者ハ假令
別ニ異能奇才無ト雖モ數千百石ノ祿ヲ與ヘテ
統フテ之ヲ採用セリ今世ニ於テハ其武技膂力
ハ一錢ノ價位無キ者トナレリ是レ時變ニ因テ
價位ノ大格ヲ變シタルモノナリ之ニ因テ其聲
呼ハ異ニシテ其實ハ同シキモノ有リ賣買兩ナ
カラ其價ヲ失フ者有リ價格中ニ於テ昂低スル
モノ有リ價格ノ大變革ナルモノ有リ此ノ四ツ
ノ區別ハ詳ニ察セサル可ラス且夫レ古ト今ト

斯ノ如ク人ノ價格ノ變シタルヲ曉ラス日夜孜々トシテ劔ヲ撃テ力ヲ試ミ身力ヲ殫クシテ資財ヲ糜スルキハ人誰カ之ヲ愚ナリト云ハサラン人ノ身上ニ於テハ其得夫斯ノ如ク明カナリ然ルニ物品ニ於テハ時ニ僥倖ノ騰貴有ルヲ認メテ其物品ノ價位ト思ヒ或ハ不幸ニシテ低落ノ際ニ遭逢スレハ廢物ト誤ルカ如キ者無キニアテス則近歲蠶種糸ノ價位低落ニ因テ桑苗ヲ廢棄シ粗濫ノ製茶ノ爲ニ日本製茶ノ價位卑下セシヲ以テ園茶ヲ鋤除シタルノ類ナリ是レ皆

價格ヲ知ラザルノ弊ト謂フ可キナリ蓋價格ノ大變更ニ非スシテ一時ノ昂低ヲ以テ物産ノ盛衰ヲ爲スハ渾テ之ニ因テ然ラサルハ無シ今農家ニ五穀菜葉ヲ産スルハ其價時々昂低スレモ皆多クハ積年ノ業ニシテ愚民ト雖モ恍トシテ其價格ヲ知ル故ニ其本資ヲ消費スルヲ大概定限有リ是ヲ以テ一時騰貴スルキハ大ニ其利益ヲ得低落スルト雖モ亦損亡ニ至ラス是レ則價格ヲ知ルノ緊要ナル所以ナリ然ルニ商賈ノ利ヲ爭フ恰モ軍機ノ如ク其變轉所謂間ニ變テ容レ

サルモノ、如シ其機ニ後レサルハ必ス巨利
ヲ占ム須更間斷有レズ忽テ損亡ヲ取ル此ノ商
機ハ人ノ容易ニ領會スル所ニアラス況ンヤ物
ヲ産シ或ハ製造スル人ニ於テチヤ其業常ニ一
ニシテ動カス故其販賣ノ機變ニ暗キハ其當然
ナリ今其商機ヲ以テ其人ニ求ルニアラス只價
位ノ大格ヲ知ルコトヲ庶幾ノミ其價格ヲ知ルキ
ハ其物品ヲ生スルニ當テ必ス價位ニ較計シテ
資本ヲ消費スルカ故ニ永ク繁盛ヲ保ツノ道ナ
リ然レモ其利ヲ得ルコト寡キカ爲メニ其製造ヲ

粗惡ニスルハ未開國ノ習風ニシテ開明ノ民ノ
好テ爲ス所ニ非ス西洋ノ人機械ヲ以テ人力ヲ
省減スルノ發明アルモ多クハ是レ之レカ爲メ
ナリ夫レ物價廉ニシテ製スル人ニ損耗無ク而
ノ衆ノ需要ニ適スルハ則テ彼我ノ幸福洪ナリ
ト云可シ宇治製茶ノ如キハ其上品ニ至テハ殆
ト五圓唐目ニ價二百ヲ出ツ斯ノ如キノ高價ハ普
尋常ノ用ニ適シ難シ故ニ普通ノ茶ノ價格トナ
ス可ラス粗惡製ノ最下品ノ茶價ノ廉ナル是亦
價格トナス可ラス都テ裁茶製茶ノ人當今此品

等ノ茶ヲ以テ目的トセサルヲ以テ價格ヲ取り
 難キ所以ナリ輸出ノ茶ハ則方今衆ノ目的タル
 ナリ以テ明治八年中我國輸出茶原價ノ平均ヲ舉
 ケ併セテ茶位大概同等ナルヲ以テ支那印度ノ
 紅茶價ノ平均ヲ附記スルヲ左ノ如シ
 明治八年即西曆千八百七十五年我國輸出茶
 原價平均
 日本製本色茶一斤 唐目百六十目 代價凡三拾七錢
 五厘ノ平均
 同年支那輸出紅茶原價平均

支那製紅茶一斤 唐目百六十目 代價凡四十錢ノ平
 均
 同年印度輸出紅茶原價平均
 印度製紅茶一磅 唐目ニシテ凡百二十目 代價凡四十四
 錢ノ平均
 明治九年十年ノ平均ハ未タ算シ得可ラスト雖
 モ概計スルニ大ナル昂低無ル可シ故ニ先ツ明
 治八年ノ平均ヲ以テ當今茶ノ價格ヲ卜ス可キ
 ナリ

第八條 米國紐育日本領事富田氏茶市

變革ノ説
 日本ト支那ヨリ輸入スル製茶ノ近況十年前ニ
 比スレハ實ニ大ナル増殖ト云ヘシ即當合衆國
 内ニ於テ他邦ヨリ輸入スル物品總價格百分ノ
 五ハ全ク右兩國ヨリ輸入スル茶ノ價ナリ○氣
 船路ト電信線ノ設立ナキ以前ハ早春支那へ註
 文ノ製茶其年ノ初冬ニ至ラサレハ合衆國ニ到
 着セサリシ故ニ支那人等十一月初旬ヲ以テ内
 地製茶ヲ買集ムル時節トセリ然ルニ現今日本
 ニテハ一番摘ノ新茶ハ三月ニ仕上リ之ヲ輸出

スルニ六月一日ニ至レハ必經紐育ニ着ス次
 七月ニ至レハ市中茶商ノ手ニ新茶ノ貯蓄充備
 スルニ至レハ日本支那茶市ノ景況ヲ知ラシメ
 ハ即時電線ヲ依テ問合スル共六十時間ヲ要
 其返答ヲ得尤該地ニ其間屋ノ管事ヲ出者ハ六
 十時間以内ニ返答ヲ得更ニ難クモ
 故ニ郵便船桑港ヲ發シタル日ヨリ四十日
 電信ヲ以テ茶ヲ註文ヲ送レバ其日ヨリ三十日
 目ニ至ル所ヲ茶ヲ自分ノ藏ニ納ルルニ至ル
 ナリ隔遠ノ地ニ電信ヲ送ルハ其入費亦大

ルヲ以テ兼テ相方申合ニ暗號ニ依テ極大ニ
 要スルナリ然レモ洋線ニ係ル電信ハ宛名ト
 雖モ該數ニ算定シテ其價ヲ拂フ故ニ内地ハ宛
 通例トスル相方社名ト雖モ亦一語ト極シ兼テ
 電信社トモ托シ置時必ス間違ハシト亦該地
 管事ト約束テ極大ニ暗號ニ依テ其景況往復ヲ要
 スル故ニ語數モ單ニシテ其次費モ通常ノ半
 ナ減ス亦如此暗號以テ該地ノ管事へ當地茶
 市ノ景情ヲ知ラシムレハ其翌日必ス支那人之
 ナ探知スルニ至ルト嗚呼支那人等ノ近時交易

上ニ注意スル如此故ニ彼地在留ノ外國茶商等
 望外ノ失利ヲ醸シ亦或ハ之カ爲メニ商業ヲ廢
 棄スルニ至ルモノアリト○茶商ノ說ニ曰近來
 世人茶ノ製方ト其各種ノ色トヲ辨別シ又其飲
 用ニ就テモ流行ヲ興起シタルト恰モ婦人ノ裝
 飾ニ付テモ時様ヲ競ト異ナルト蓋茶商ノ
 茶ヲ檢査スルヤ其茶ヲ摘ミ美麗ノ仕立ナリト
 云亦仕立屋ニ於テモ此語ヲ用ユ其流行ヲ一轍
 ニスルト賞語ヲ一様ニスル豈奇ナラス哉○十
 年以來米國人真ノ茶味ヲ覺知シ漸次茶ニ固有

スル所ノ佳味日本自用製國ヲ喫スルヲ好ムニ至レ
 リ如此製茶ノ仕立ハ輸出製ヨリ却テ容易ニシ
 テ只茶ニ火ヲ入ルト船積ノ手數ノミナレハ其
 人費モ亦隨テ少ナシ是等ハ都テ十年以來茶市
 ノ一大變革ト云可シ
 第九條 日本製茶ハ各國ニ普及セサル
 事並輸出茶斤數
 支那ノ外國ニ製茶ヲ輸出スル年既ニ久シ故ニ
 其始ハ各國人モ茶ハ專ラ支那ニノミ産スルモ
 ノトセリ是ヲ以テ支那點知ノ商人種々ノ製茶

ナ以テ各國人ヲ欺弄シ其利ヲ貪ル而メ外國人
 モ未タ茶味ニ精密ナラサルヲ以テ其欺弄ヲ受
 ケサルヲ得ス然ルニ漸次茶味ニ熟シ當今ニ
 至テハ紅緑ノ二製ノミヲ需用ス支那モ亦其嗜
 好スル所ヲ窺知リ最モ此ノ兩品ヲ製ス然ルニ
 歐洲各國及ヒ其他モ多クハ紅茶ヲ好テ之ヲ主
 用スレモ只米利堅ノミハ綠茶ヲ好テ之ヲ主用
 ス我日本本色茶ヲ需用スルモ之ニ淵源シタル
 ナリ支那人又其葉色ノ鮮美ヲ以テ利ヲ射ラシ
 ト欲シ洋説阿仙藥丹藥ノ類ヲ和シテ之ヲ製シ

其色ヲ裝出ス此ノ三加品ハ人身ニ害有テ益無
シト雖モ之ヲ和シタル茶ハ其綠色甚タ美ニシ
テ一目シテ以テ人ノ賞心ヲ動シ得ルニ足ル米
利堅人モ之ヲ知ラサルニ非スト雖モ其需用已
テニ久シク人皆之ニ馴レテ以テ常トシ且ツ其
加品ノ害タル茶ノ本質ノ效用ヲ大ニ妨クルニ
至ラサルヲ以テ今ニ至テ愛顧衰ヘサルナリ我
國本色ノ製茶ハ其色支那ノ綠茶ニ及ハスト難
モ純粹ノ製茶ニシテ人身ノ健康ニ有益ノ多寡
ハ論ヲ俟タスシテ明カナリ然レモ既ニ彼ノ國

ノ風習久シキヲ以テ一時ノ辦解ニ因テ全國ノ
人民頗動ス可ラス暫ク其嗜好ニ任從スルノ外
豈他有ランヤ米利堅ノ我國ノ製茶ヲ購求スル
茲ニ年有リ而シテ其愛顧ノ意支那ノ綠茶ニ及ハ
ス況ヤ他ノ紅茶ヲ主用スルノ國ニ於テ我本色
ノ製茶ヲ懇望スル者鮮キヲ明カナリ然ルモハ
則米利堅一國ノ需用ニ充ルノミニシテ輸出ノ
道狹シト謂可シ然リト雖モ米利堅ハ大國ナリ
其國舉テ我茶ヲ嗜好セハ販賣小テラザレモ勢
ヒ何ソ斯ノ如キヲ得ンヤ但年々需求ノ數量

ナ増加スルハ亦幸ト云可シ今曾テ米國新^ニ克^クノ
 領事官タリシ富田氏^ニ調^ト査^スノ日本茶輸出ノ量數
 ナ記スルヲ左ノ如シ
 二十五万四千四百斤 一千八百六十二年
 一万六千九百四十八斤 一千八百六十三年
 九十七万七千六百斤 一千八百六十四年
 二百十八万八千八百〇七斤 一千八百六十五年
 百六十一万二千七百五十斤 一千八百六十六年
 七百五十九万二千二百十五斤 一千八百六十七年
 六百〇五万四千三百四十斤 一千八百六十八年

八百七十万〇百〇十斤 一千八百六十九年
 一千〇七十五万四千斤 一千八百七十年
 七百八十五万八千斤 一千八百七十一年
 千三百九十八万斤 一千八百七十二年
 千六百六十二万斤 一千八百七十三年
 畢
 右輸出ノ量數僅ニ十餘年ニシテ其増加スル
 斯ノ如シ而シテ近年ニ至テハ又増シテ千九百万
 余斤ニ上レリ斯ノ如ク増加スルハ必^ニ竟^ス米國
 需用有ルカ爲^ニナリ且事物共ニ歲月ヲ遂^テ開^ク

進スルカ故ニ必ス遠カラステ我本色茶ノ純
粹ナルヲ喜ヒ支那絲茶ノ加品有ルヲ損斤スル
ノ期有ル可シ其製方紅茶ト共ニ益精巧ヲ極メ
偏廢ス可ラス
第十條 本色茶製方概畧
凡ソ製茶ノ事ハ固リ難事ニ非ス人ノ容易ク領
會スルコトナリト雖モ文字上ニ記スルコトハ甚ダ
難シ如何トナレハ火度ノ加減揉團揉解ノ緩急
分節減籜ノ精粗等皆活事業ニシテ一毫ヲ誤レ
ハ其色ヲ生セス其香味ヲ變ス故ニ實際ニ就テ

習熟セサレハ杜撰ノ製タルコト免レズ然レモ
其秘事奇傳有ルニアラサルヲ曉知セシメンカ
爲レニ其概畧ヲ記シ以テ習熟階梯ノ一助トス
生葉ヲ以テ直チニ輸出茶ヲ製スルハ支那ノ製
後條支那製茶ノニ效ニ釜熬ニシテ焙爐ヲ用ヒ
說ナ見ル可シニ九州地方ノ精野製或ハ青
ス概シテ之ヲ云ハ九州地方ノ精野製或ハ青
柳製ノ類是レナリ故ニ之ヲ畧ス
今製スル本色茶ハ即チ宇治流ニ因リテ專ラ輸
出テ目的ヲシテ製シタル茶ヲ再製シテ色澤光
澤ヲ生セシムルナリ始メ原茶掛ケ目五六百

目ヲ熬釜ニ入レテ之ヲ熬ル一時間或ハ三四十分時間原茶ノ模様ニ應レテ運速一ナラス始メ少ク火度ハ充分強キヲ要ス二百度以上トス之ヲ熬ルヲ暫時ニシテ茶葉ニ濕氣ヲ帶ブ其時ヨリ微シク火度ヲ減ス可シ而メ之ヲ熬燥スルニ從ヒ其葉色淺緑ニシテ聊カ銀色ヲ含ム之ヲ其トシテ釜ヨリ上テ分篩チ以テ其粉未ヲ去リ減籬チ以テ其浮片ヲ籬去ス熬燥中最モ工手ヲ警メテ些ノ焦燒無キヲ要ス聊カ間斷有レハ忽チ焦燒シテ色ヲ失ヒ光澤ヲ生セス深ク注意ス可シ

籬出シ及ヒ粉末其外空耗ノ減茶一割八分ヲ通當ノ減トス造熬釜ニ新發明有リ之ヲ用ユレハ製ス故ニ此篇ニ記載セテ後輯ノ時ナラズ此ノ茶ヲ米利堅ニ輸送スル其費用時ニ物品ノ昂低ニ因テ一ナラスト雖モ之ヲ概算スルニ原茶製造ノ諸費及ヒ鉛箱錦繪付キノ上箱アソメ一ラ包ミ二箱一磅入ニシテ輸出マテノ惣費三圓五十錢トス此條製方ニ關セスト雖モ茶業ノスラ附

第十一條 支那本色茶製方畧說譯

綠茶ノ製タルヤ折疵枯葉等ナキ活色ナル鮮葉
 ナ擇ヒ熬釜ニ入レ十分ナル熱火ヲ以テ葉ノ萎
 弱ナルヲ度トシ竹簾ニ移シ十分ニ揉ミ茶葉圃
 塊無キヨフ揉解キ焙爐ニテ乾燥スルヲ六七分
 ニシテ踏袋ニ裝ヒ踏ムヲ數次袋中ノ茶圓形ヲ
 成ス可シ又團塊ヲ解キ再ヒ熬釜ニテ双手之ヲ
 熬リ長形ナラサルヨフ十分乾燥スルヲ緊要ト
 ス夫レヨリ一揃ノ篩ヲ以テ之ヲ分篩ス此製ニ
 限リ一種ノ原茶ヲ以テ其良否ニ從ヒ二十六品
 或ハ二十四品二十品十六品十四品十二品等ノ

多品ニ分テ得可シ分篩ノ上一品ツ、械篩ヲ以
 テ片葉ヲ篩去シ其篩去シ能ワサルモノヲ揀工
 ニ付シ揀精ノ後ヲ再ヒ釜ニ入レ熬燥十分ニシ
 テ活色ナルヲ見ハ此ニ至リ始メテ成製ナルヲ
 得ルナリ
 愚案ニ云是レ則支那真正ノ本色製茶ノ方
 法ナリ然レモ今外國ニ輸出スルモノハ大
 概加品ヲ以テ綠色ヲ裝フ西洲人分析ノ術
 明且密ニシテ却テ之ヲ喜テ咎メサルハ何
 ソヤ恐ラクハ是レ一ノ習慣ナラン乎習慣

ノ移リ難キ恐ル可キカナ
第十二條 紅茶製方概畧
始ノ生葉ヲ〔イ〕後ヲ覽ス可シ合ノ上ニ薄ク散布シ凡一
時間ヨリ一時半時間程大陽ニ曝ラシ此時間ハ
間斷無ク練リ返シ上下共ニ其温暖ノ氣ヲ受ク
ル均シカラシム可シ其葉能ク萎柔ニシテ之
ヲ揉テ毫モ摧ケサルヲ度トス雨天ニハ十二時
間ヨリ二十四時間程空氣ニ曝ラスヲ要ス其時
間ノ長短ハ茶葉ノ性質ト採摘スル時分ノ空氣
ノ模様トニ因リテ替ルナリ

之ヲ〔ロ〕ノ上ニテ充分ニ揉ミ手裏ニ握束シテ槽
隙ヨリ液汁ヲ絞出スルヲ度トス其際之ヲ揉ミ
之ヲ揉解キ須臾モ間斷無キヲ要ス之ヲ揉ムニ
兩手ニ一攫シ掛目凡百七八十目之ヲ二十分時間ニ揉上
ル
之ヲ〔ハ〕ノ内ニ入レ之ヲ押シ堅メ茶葉ノ厚サ三
寸程ニシテ其上ヲ布ヲ以テ三重斗リ覆フテ其
儘又大陽ニ曝ス凡ソ一時間程此時其葉端ト
蒸トニ紅色ヲ生ス是レヲ己前ノ順序ノ如トク
〔ロ〕ノ上ニテ之ヲ揉ムヲ二十分時間程ニシテ〔ハ〕

ノ内ニ入ル、初メノ如クシテ之ヲ覆テ又大
陽ニ曝ス、凡ソ三十分時間ナルキハ已テニ
全葉ニ紅色ヲ生ス之ヲ焙爐上ニテ乾燥ス、火度
ハ最モ強キヲ要ス而シテ茶ノ焦焼セサルヲ注意
シテ間斷無ク極混スヘシ然レモ宇治製ノ如ク
焙爐上ニテ頻リニ之ヲ揉ムニアラス心ヲ用ヒ
テ茶葉ヲシテ相磨セシム可カラス然ラサレハ
茶ノ光澤ヲ失ナヒ甚ダ其品等ヲ損ス
普通ノ焙爐ハ從來紙ヲ用ユレモ此ノ製茶ニハ
用ヒス割リ竹ヲ編ミタル(ニ)ノ上ニテ乾燥シ箕

ヲ以テ吹簸シ篩ヲ以テ大小ヲ分テ又焙爐上ニ
上クルニ之ヲ最終ノ焙爐トス、火度ハ弱キヲ好
トス
又雨天ノ時ハ大陽ニ曝ス可キ所ヲ焙爐ヲ以テ
代用シ其順序ハ大陽ニ晒ラストキニ均シクシ
テ度ヲ失ワサルヲ緊要トス能ク紅色ノ生スル
ヲ以テ度トス可シ大概焙爐上ニテハ大陽ニ曝
スヨリハ時間後ルナリ
第十三條 支那紅茶製法畧説
紅茶ノ製タルヤ先ツ鮮葉ヲ以テ少ク日光ニ曝

シ釜ニ投シ三四分熬リ竹簾ニテ揉ミ上ケ其儘
 項刻ヲ過キ少ク紅色ヲ帶ヒタルヲ蒸箱ニ滿裝
 シ火厨ニ收メ炭火ヲ以テ之ヲ蒸ス火最モ多キ
 ナ要セス厨門空氣ヲ通セサルヨウ緊閉シ其儘
 一夜ヲ經レハ匣中ノ茶葉紅色ヲ顯スヘシ其度
 ナ量リ葉箒等ニ散開シ冷テ取り再ヒ日光ニ曝
 シ凡ソ七八分ヲ乾シ次ニ焙爐ニ掛ケ十分ニ烘
 燥セハ茶自カラ香氣ヲ發スヘシ分篩ハ三號ヨ
 リ七號篩マテノ茶ハ必ス吹簾ヲ以テ浮片ヲ吹
 去リ黄色ヲ帶ヒタル老葉桿實ヲ揀精シ八號ヨ

リ九號篩マテハ風扇ニ掛ケ浮片ヲ去リ仕上焙
 爐ニ掛テ始テ成製ニ至ルヘシ以上ハ長形ノ製
 ナリ又圓形ノ製アリ此ノ製ヤ又前線製ノ如ク
 踏袋ニテ踏ミ凡ソ圓形ヲ成スチ度トシ焙爐ニ
 テ烘焙スヘシ此ノ圓形ニ限リ篩ハ都テ走馬篩
 法ヲマハルシナガチ用ヒ其余ハ長形ノ製ト異ナル
 ナシ色ハ最モ深紅色ヲ尙フ若シ紅色十分ナラ
 サレハ蒸桶ニテ蒸サハ十分ナル紅色ヲ發スヘ
 シ

第十四條 本色茶紅茶製方費及耕作地

栽茶園ノ比較表
 今宇治輸出製茶ト紅茶製ト費用及ヒ利益多
 寡ヲ概算スルニ其差尠カラス故ニ之ヲ左ニ表
 出ス
 宇治製ハ茶葉柔軟ナラザレハ製シ難シ紅茶製
 ハ茶葉己テニ長シタリトモ採テ之ヲ製スルニ
 妨ケ無シ故ニ生葉ノ掛目一貫自ニテ其價五錢
 ノ差ヲ生ヌ且ツ紅茶ハ生葉ヲ蒸スヲ要セス亦
 其費用ヲ減ス可シ
 比較表

宇治輸出茶製		紅茶製	
圓	錢	圓	錢
厘	糸	厘	糸
此製茶二百五拾目	此製茶二百五拾目	此製茶二百五拾目	此製茶二百五拾目
內五拾目	內五拾目	內五拾目	內五拾目
籾出シ粉茶引	籾出シ粉茶引	籾出シ粉茶引	籾出シ粉茶引
殘二百目 代金	殘二百目 代金	殘二百目 代金	殘二百目 代金
此斤唐目ニテ 壹斤二合五夕	此斤唐目ニテ 壹斤二合五夕	此斤唐目ニテ 壹斤二合五夕	此斤唐目ニテ 壹斤二合五夕
一斤代三十五錢替	一斤代三十五錢替	一斤代三十五錢替	一斤代三十五錢替
籾出シ粉茶 五拾目 代金	籾出シ粉茶 五拾目 代金	籾出シ粉茶 五拾目 代金	籾出シ粉茶 五拾目 代金
此斤唐目ニテ 三合壹夕二五	此斤唐目ニテ 三合壹夕二五	此斤唐目ニテ 三合壹夕二五	此斤唐目ニテ 三合壹夕二五
二	一	八七五	二
一	八七五	二	一
八七五	三合壹夕二五	二	一
八七五	三合壹夕二五	八七五	三合壹夕二五

一斤代七錢替	代金合	四五九	三七五	内 生業代	三、	製茶費用	一二五	右	合金	四二五	差引益金	三四三七五	一日ノ製茶生業百貫	目トシテ	此益金	三四三七五
一斤代七錢替	代金合	四五九	三七五	内 生業代	二五	製茶費用	六二三四	右	合金	三一三四	差引益金	一四七三五	一日ノ製茶生業百貫	目トシテ	此益金	一四七三五

十五日間益金合 五一五六二五、

十五日間益金合 二一九一五二五、

普通ノ耕作地ト裁茶ノ園地ト收穫及ヒ費用ノ比較概算ヲ左ニ表出ス耕作地ノ概算ハ武州豊島郡東京府下板橋ニ於テ明治九年ノ平均ヲ取リ調査スル所ナリ固ヨリ各地一ナラス必ス收穫價直費用等殊別有ルヘシ覽者宜ク之ヲ諒ス

茶園一段歩收入	圓	錢	厘	忽糸毛	手作畑上中下平均一段歩收入	圓	錢	厘	忽糸毛
播種ノ年ヨリ三年					冬作麥壹石九斗一圓六斗替	三	一六	六	六六、
間ハ畦間ニ耕作ス					夏作黍壹石三斗一圓四斗替	三	二五	六	六六、

此議再興アラント多少ノ想像ヨリ感觸ヲ起茶ノ價ヲ下ケオ併シナガラ買人ハ其仕方充分ナリ且大統領並大藏卿ノ見込ニ依テ十五セント(一磅ニ付)課税セントノ議案ヲ議事院ニ送リシ以來物品所持ノ問屋等貯蓄シテ賣方ヲ見合スルニ至レリ併シ大畧去年ノ景況ト齊シク相庭事ニ依テ賣方ヲ見合スルニ非ルナリ

本年中ノ賣高七万七千四百箱ノ内綠茶二万二千七百箱日本茶二万箱烏龍二万九千九百箱河香及ソーケン四千八百箱○本月ノ間日本茶ノ

内五等以上ノ品種少シク其價格ヲ進メリ且目今充分ノ輸入ヲ得ハ元價ハ隨テ下落セント想思セシニ近時ノ報告ニ依テ推考スルニ全ク低價ヲ得ヘカラス然レモ飲料ヲ欠クノ患ハ無ル可シ

等	日本茶市價但一磅ニ付	支那茶河香ソーケン價
第一品	五十八錢ヨリ六十錢	
第二品	五十三錢ヨリ五十五錢	五十五錢ヨリ六十錢
第三品	四十七錢ヨリ五十錢	四十錢ヨリ五十錢
第四品	四十壹錢ヨリ四十三錢	三十八錢ヨリ四十錢

第五品	三十六錢ヨリ三十八錢	三十二錢ヨリ三十五錢
第六品	三十三錢ヨリ三十四錢	二十五錢ヨリ二十八錢
第七品	二十七錢ヨリ三十一錢	十七錢ヨリ二十錢

本文中大統領并大藏卿ノ見込ニ依テ茶ニ課税スルノ云々アリ此件吾國茶商關係ハキ能ワス仍テ數言ヲ發ニ迷テ原來議事院ノ開館ニ臨テ大統領ヨリ議官并ニ名代エ向ケテ送ル所ノ公書アリ是ヲ名ツケテ「プレシデントマツシ」ト稱シ内外事務ニ係シタル景況并ニ向後可

取扱事務ノ見込ヲ記載シテ送ル所ノモ
ノナリ即本文中記載セシ議案ナル者ハ
千八百七十五年十二月七日附其書中合
衆國會計ノ部察ニ關シタル所ヲ左ニ摘
譯ス
合衆國紙幣減却ノタメ金貨ヲ貯蓄ノヲニ就
ハ後來歲入ヲ増スカ或ハ入費ヲ減スヘキカ又
ハ兩様ヲ執ルカノ權力ヲ大藏卿ニ増與セン
テ要ス蓋歲入ヲ増シ入費ヲ減スルヲハ決
事ニ非ルナリ如何トナレハ入費ヲ減少スルモ

政府ノ義務ニ於テ敢テ欠ク所ナク亦事務上ニ
隙碍ヲ起サズル可シ且歳入ヲ増スルニ就テハ
茶并コーヒーエ輸入税ヲ再ヒ課賦ノ外ナカル
ヘシ即是等ノ物品エ課税セハ現今收納スル所
ノ輸入税高エ大凡千八百萬弗ヲ増加スヘシ必
竟右等ノ物品エ加税スルモ決シテ費者ノ出價
ヲ増スル無ラン如何トナレハ右物品ハ吾輩ノ
費用最モ大ナレハ曾テ輸入税ヲ廢シタルモ些
カ其價ヲ減セス其故ハ其産所ニテ比較スル程
ノ輸出税ヲ加フルニ至レハナリ

現今收納スル所ノ諸税中之テ調理スルノ入費
多クシテ其益充分ナラザルモノハ之ヲ取除キ
内國人ノ利益ヲ得セシムヘシ余爰ニ諸品製ニ
用ル原物ニ付テ其得失ヲ論セン抑輸入税ノ懸
リタル原物ヲ以テ自國ニ於テ製造スル時ハ其
品ノ原價ニ輸入税モ籠リ在レハ即其税ハ其製
品費者ヨリ直ニ出スト同様ナリ故ニ是等ノ税
ハ内國費者ヨリ出スト同様ナルノミナラス却
テ外市ニ於テ自國製ト同様ナル品物ヲ製造ス
ル者ニ爲メニ保護トナルナリ云々

亦合衆國大藏卿ヨリ千八百七十五年十二
月六日附テ以テ議院ニ報告書ノ内茶并コ
ロヒエ輸入税再課云々ノ部ヲ拔譯ス即
左ノ通り
茶并コロヒエ取税再興
明年出納ノ概算ト又現大藏省ニ金貨貯蓄ノ要
用ニ係リテ余大藏卿謹テ千八百七十二年ノ公
議ニ因テ茶並コロヒエニ取入税再興アラシ
テ議事院ニ望ム所ナリ去ル年報中ニ余大藏卿
ノ見込ヲ陳述セシ通り右品種ノ輸入税ヲ解キ

シモ國內費者ノ利益ニ至ラス如何トナレハ當
國ニテ解税ノ高程ハ出産所ニテ原價ヲ増シタ
ル故ナリ且當國ニテ解税ノ高程ハ右品種出産
ノ國ニ於テ輸出税ヲ増シタレハ即増加ノ輸出
税ハ此國ノ費者ヨリ拂フ譯ナリ○以上ノ實況
ヲ確證スル爲ニ尙又下ニ思考ヲ述ヘ併セテ余
大藏卿該品ノ輸入税再興ヲ希望ス○該品ノ輸
入最モ多量ニシテ此税ヲ納ムルヲ易ク而シテ
他種ノ收税ニ比較スレハ欺詐ノ害ヒモ少シ
云々

右二條ニ就テ記者案スルニ現今吾國生産中米
 國ニ輸入スル物品ハ茶ヲ以テ第一等トス即去
 年中當館第三年報書ヲ見ユ吾國ヨリ賣込タル茶ノ價額七
 百萬弗余ニ登レリ從テ茶ニ從事スル自國ノ農
 商益勉勵幸福ヲ望ム固ヨリナラン然ルニ現今
 合衆國政府ニ於テ輸入茶ニ課税セントノ起リ
 タレバ若シ此等ノ說吾國ニ傳播セハ後來茶ノ
 景況如何ナラント苦慮スルモノアラントス故
 ニ記者篤ク是等ノ事情ヲ採リ課税議案ノ成否
 如何ヨリ縱令課税スルニ至ルモ吾國ヨリ輸出

ノ茶ニ障礙ナキノ理ヲ知り得タリ依テ吾國茶
 ニ從事スル者ノ爲其理ヲ解明セントス即前二
 條ノ議案摘譯中ノ主意ニ「先年茶并コーヒー等
 ノ輸入税ヲ解キシモ米國內費者ノ利益ニ至ラ
 ス如何トナレハ解税ノ高程ハ右品種出產國ニ
 於テ輸出税ヲ増シ或ハ即外國ノ輸出税ハ米
 國費者ヨリ拂フ理ナリ云々」トアリ此文意コー
 ヒー而已ヲ以テ論スレハ頗ル適當ナレモ茶ノ
 輸入ニ此文意ヲ併合シ見ルキハ適當ナラサル
 ヲ覺フ如何トナレハ米國ニテコーヒーノ解税後

輸出スル國ニ於テ課税ヲ起シタリ次テ米國內
ニ費者ノ増加ト其他ノ原由ニ依テ輸入解税ヲ
以テ前ニ比スレハ現今壹磅ニ付二三錢ノ市價
ヲ増タリ然レモ茶ニ至テハ之ト同一ニ論及シ
難シ如何トナレハ當國ニ於テ茶ノ輸入税ヲ解
キシ時ニ當リテ吾國ニ於テ輸出税ヲ増加セス
亦支那ニ於テモ輸出税ヲ増加シタルヲ聞カス
亦輸入解税ノ以前ニ比スレハ茶ノ價平均四十
五ヨリ五十ポルセントヲ減シタル明ナリ併シ
是レハ決シテ輸入税ヲ解キシノミ減價ヲ起シ

タルニアラス其原由數多アリ今其一ニテ言ハ
ン第一太平洋汽船往來初マリテヨリ減價ヲ起
シ次テ太平洋車道ノ落成桑港ヨリ一層價
ヲ減シタリ其故ハ内外茶市相接近セルヲ以テ
望ニ應シ運輸ノ便ヲ得ルヨリ市場ニ永ク物貨
ヲ貯蓄スルヲ要セサレハナリ亦近來地中海
ノ海峡開ケタルモ其一ニ居レリ第二ニ飲用者
次第ニ増加隨テ出產繁殖茶業盛ニ至リタルナ
リ而ノ第三ニ輸入税ヲ解キシ等ノ類ナリ之レ
皆以テ以前ニ比スレハ茶價ノ減シタル所以ナ

レハ現今ノ價ヲ以テ昔時ト同様トシテ議セル
ハ其主意オホキカ徳ナラサルヲ覺オホシフ蓋シ茶ハ合衆國ニ
産セスシテ日用スロ樞要モトノ物品ナレハ之ニ課税ス
ル不適オホキト思考スル者ナキニ非ス記者案スルニ
然ラス今合衆國政府於テ特ニ金貨ノ貯蓄ヲ要
スルナラハ茶并コーヒーエ適宜キノ税ヲ課スル
モ國民ノ爲メニ敢テ不可ト云ヘカラス如何ト
ナレハ飲用者毎ニ一ケ年五十錢前後ノ出價ヲ
増スノミニテ政府之ヲ收ムルノ手數懸オホキラサレ
ハ隨テ入費モ些少而シテ巨額オホキノ金ヲ收納スル

ヲ得レハ前摘譯中所論ノ如ク人民ノ直益オホキト言
ハサルヲ得ス果シテ然ラハ此議案ハ議院ニ於
テ直ニ課税ノヲニ決スヘキカ記者臆測オホキスルニ
恐ラク課税ノヲニ決スヘシ然レモ早クトモ本
年ノ末ニ至ラサレハ決議ニ至ラサルヘキカ尙
當國政府ノ情態ニ就テ記者ノ臆察オホキヲ畧言オホキセン
本年ハ大統領撰舉オホキノ年ナリ抑此撰舉ニ當ル者
ハ黨派ノ多少ニ係ル故ニ現今議員等ノ世評オホキヲ
聞クニ院中ニ二黨アリテ兩黨相半オホキス而シテ大
統領ノ撰舉投標ハ甲黨ニ落シカ或ハ乙黨ニ決

センカ今尙偏重ナキカ如シ依テ各黨相互ニ人
心ヲ失ナハンコトヲ恐ル爰ニ於テ互ニ課税等ノ
議ニ着手自ラ遅々スルモノ、如シ是レ即大統
領撰擧ノ後ニ至ラサレハ此議決スヘカラスト
臆測スル所以ナリ且先年茶并コーヒーノ税ヲ
解キタルモ黨派ボリシ一術ノナス所ニシテ今
再課税セントスルモ速ニ決議スル能ワサルモ
亦是ボリシ一ニ據ルナラン因ニ記ス記者一昨
年中一時歸朝ノ際或人ノ談ヲ聞クニ米國ニ於
テ吾國ノ爲メニ茶ノ税ヲ解キタレハ之ニ謝ス

ルニ吾政府於テ米國ヨリ輸入物品ノ内一二
ヲ無税タラシメンコトヲ望ムト豈外國政府自國
ノ公利ナキニ他國ノ爲ニ慢ニ解税スルノ理ア
ラシヤ況ヤ茶并コーヒー税則ノ取捨黨派ボリ
シ一ニ據ル下記者ノ臆測ヲシテ實ナラシムハ
此人ノ誤レル亦甚シト云ヘシ然レモ是道路人
ノ說ナレハ只冷笑シテ去リシノヨシ○尙合衆國
政府茶ニ課税スヘキコト決定スルモ吾國自國輸
出ノ茶ニ障碍ナキノ理ヲ言フン此議案ノ如ク
壹磅ニ付十五錢ノ税ヲ課ストモ國內費者格別

ノ費額ヲ増サレハ決テ費者減少スヘカラス
亦正シキ茶商ノ爲メハ相當ノ課税アル方却
テ商業上ニ良シト是茶ニ課税アル時ハ市價常
ニ靜定シテ格外ノ高低ヲ起サレハ力リ必竟
相庭事ヲ爲ス奸商アル時ハ朝ニ僥倖ノ利ヲ射
ルモ夕ニ瓦解ヲ爲ス以思アリ大ニ正業ニ損害
ヲ醸ス故ニ正商ハ決シテ課税ヲ恐レサレナリ
然レモ若右ノ税額ニ一二倍ヲ増加スル時或
ハ稍一時費者ヲ減シ物品ノ流通ヲ滯縮セン歟
然レモ亦漸々其費者ノ復舊スル疑ヒヲ納レス

ト此說當府二三ノ東練茶商ニ就テ質スニ皆同
一ナリ故ニ輸入商ニ於テ障碍ナケレハ輸出國
ニ故障ナキ論ヲ俟サルナリ然ラハ合衆國政府
於テ輸入茶ニ適宜ノ税ヲ課スル内外茶商ノ爲
メニ弊害無キ明ナリ○今時ニ至リ茶ノ樞要ナ
ルハ酒煙草ノ如キ奢侈ノ贅品ニ非レハ昔時合
衆國於テ重税ヲ課シタルモ費者之ヲ廢スルヲ
得ス亦費者ノ常用ヲ欠キタルヲナカリキ即合
衆國茶税變換ノ大略ヲ左ニ陳述ス
合衆國ニ於テ茶ニ課税シタル最初ハ千七百八

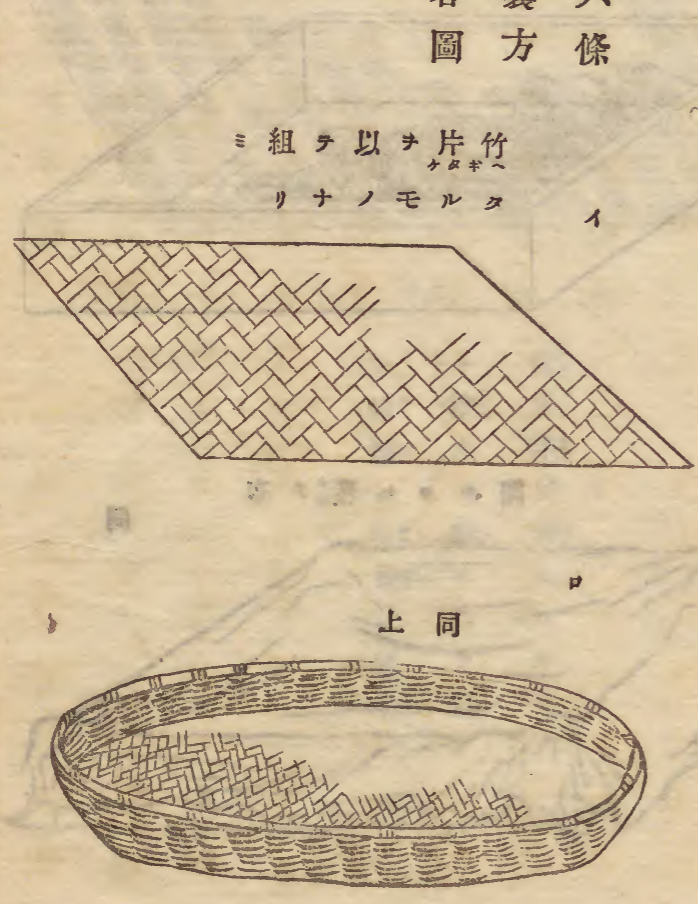
十九年七月四日ナリ皇歴安永四年此時ノ税則ハ茶ノ
 品種ニ因リ一磅ニ付十五錢ヨリ四十五錢マテ
 ト定メタリ其二ケ年ノ後即千七百九十一年ニ
 至リ再ヒ税則ヲ改メ前額エ十「ポルセント」ヲ増
 加シタリキ而シテ千七百九十二年九十五年九
 十七年ノ間ニ諸種ノ税則ヲ改メシタレモ茶税
 ハ依然トシテ改メ併シナカラ千八百年間寛政十二
 年中等ノ茶一磅ニ付廿七錢ヨリ五十錢マテノ
 増税ヲ課シ此税則英國ト戦争ノ時即千八百十
 二年マテ引續タリ此戦争三ケ年ノ間三ケ度茶

ノ税則ヲ改正シタリ之即軍費ニ依テ巨額ノ國
 債ヲ拂ハシカ爲ナリキ次テ千八百十六年享和十三
 年二月五日ノ改革ハ下等茶一磅ニ付卅四錢其
 以上ハ一弗マテノ増税ヲ課シタリ而シテ千八百
 十九年ニ至リ合衆國政府ノ國債殆ト償却セル
 ニ依テ茶税隨テ減シ一磅ニ付十四錢ヨリ六十
 八錢ニ至レリ此後千八百廿四年文政七年廿七年廿
 八年ノ間諸種ノ税額改革アレモ茶税ハ依然ト
 ノ十年間變換ナカリキ而シテ千八百三十年ニ至
 則中等ノ茶ハ六錢其以上ハ卅七錢迄ニ減税シ

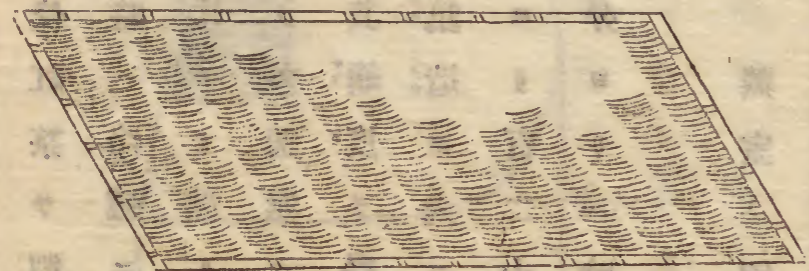
尙千八百三十二年天保三年合衆國政府ノ國債全ク
 消却シタルヲ以テ茶ノ稅最モ減少シ殆ト無稅ノ
 如キニ至レリ去リナカラ外國船ニ依テ輸入ノ
 茶ノミハ一磅ニ付十錢ノ收稅ト定メラレタリ
 此稅則ハ千八百六拾一年文久元年マデ引續同年是
 ヲ改正シテ一磅ニ付拾五錢ヨリ二拾錢マデナ
 課稅シタルニ翌千八百六拾二年ノ會議ニ依テ
 一磅ニ付二拾五錢課賦セラレタリ次テ千八百
 七拾年七月四日又一磅ニ付拾五錢ニ減却シ而
 シテ千八百七拾二年五月三日明治五年ノ會議ニ依

全テ同年七月一日ヨリ無稅ニ定メラレ現今共ニ
 シ

第十六條
 紅茶製方
 器械畧圖



初二十
 百十
 皆歴
 八節
 八節
 十二



從來紙ヲ用ヒタルモノ
 ニ換ルニ編ミ竹ヲ以テ
 ス賠越ハ從前ノ通り

茶葉ヲモテ箱ニ
 裝ヒタル圖

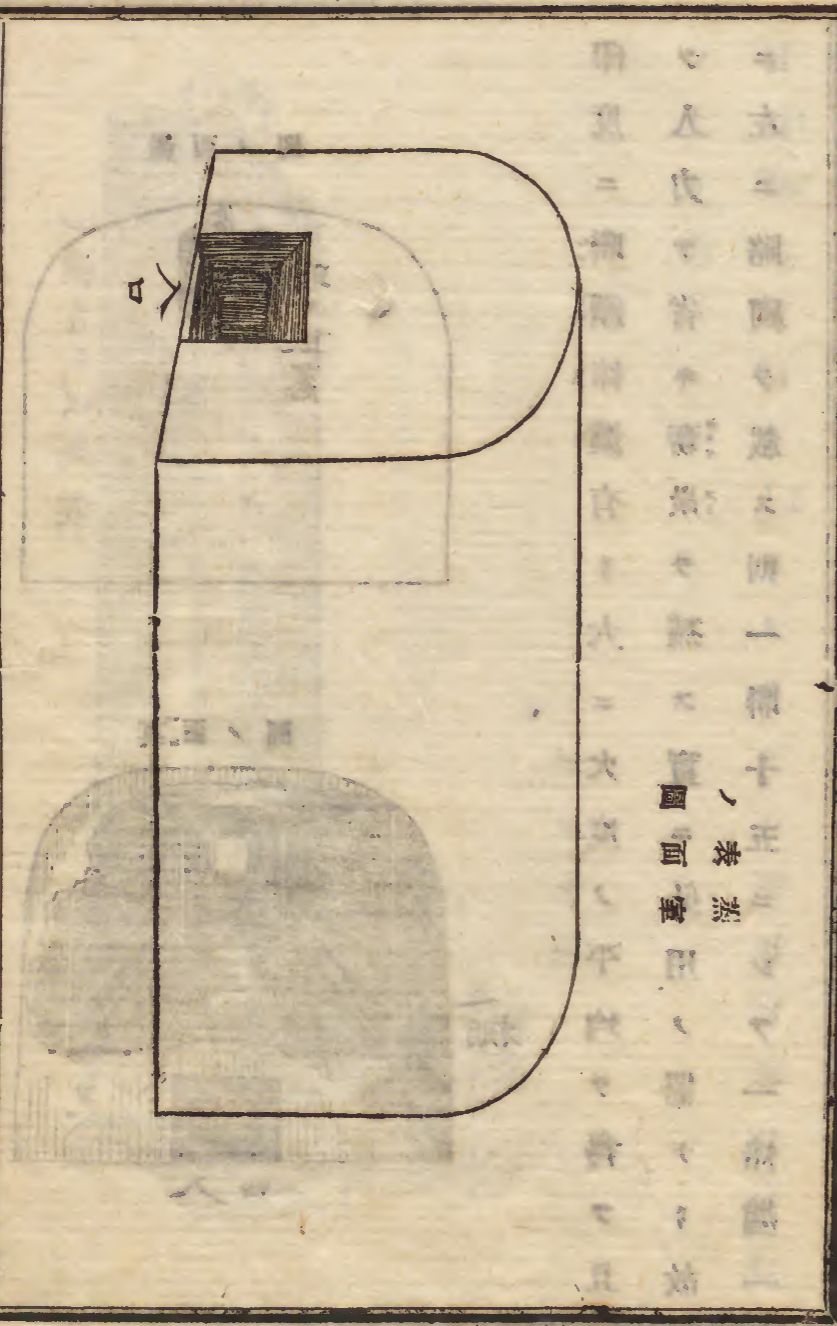


布ヲ覆ヒタル圖
 同



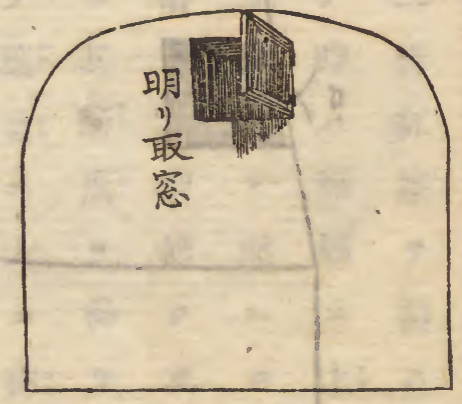
第十二條紅茶ヲ製スルニ太陽ノ温蒸ヲ以テシ
 雨天ノ時ハ焙爐ニ上ルヲ記シタルハ是レマ
 デノ方法ナリ然ルニ蒸室ヲ構造シテ温蒸スレ
 ハ晴雨ノ差別無ク其温度我が期望スル所ニ隨
 ガ故ニ其適度ヲ得テ製法最モ容易ナリ蒸室ハ
 普通ノ築造ニ大ニ殊ナルヲ無シ室中ノ温度ハ
 百十度ヨリ百二十度マデトス温蒸ノ時間ハ一
 時二十分ヨリ一時半マデトス

蒸室ノ圖

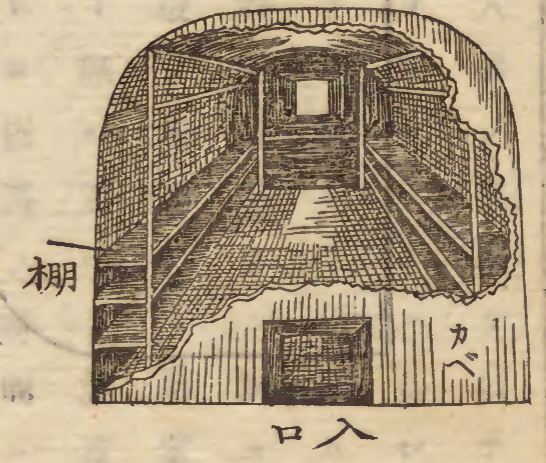


印度ニ聯續焙爐有リ大ニ火度ノ平均ヲ得テ且
 ツ人カヲ省キ新炭ヲ減ス實ニ必用ノ器ナリ故
 ニ左ニ略圖ヲ載ス則一聯十五ニシテ一焙爐一

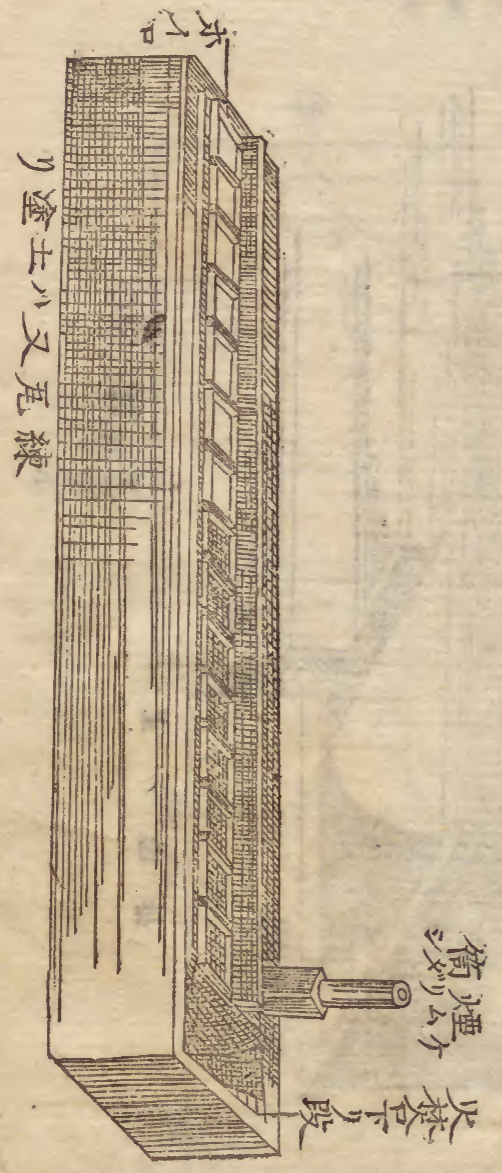
圖ノ面側



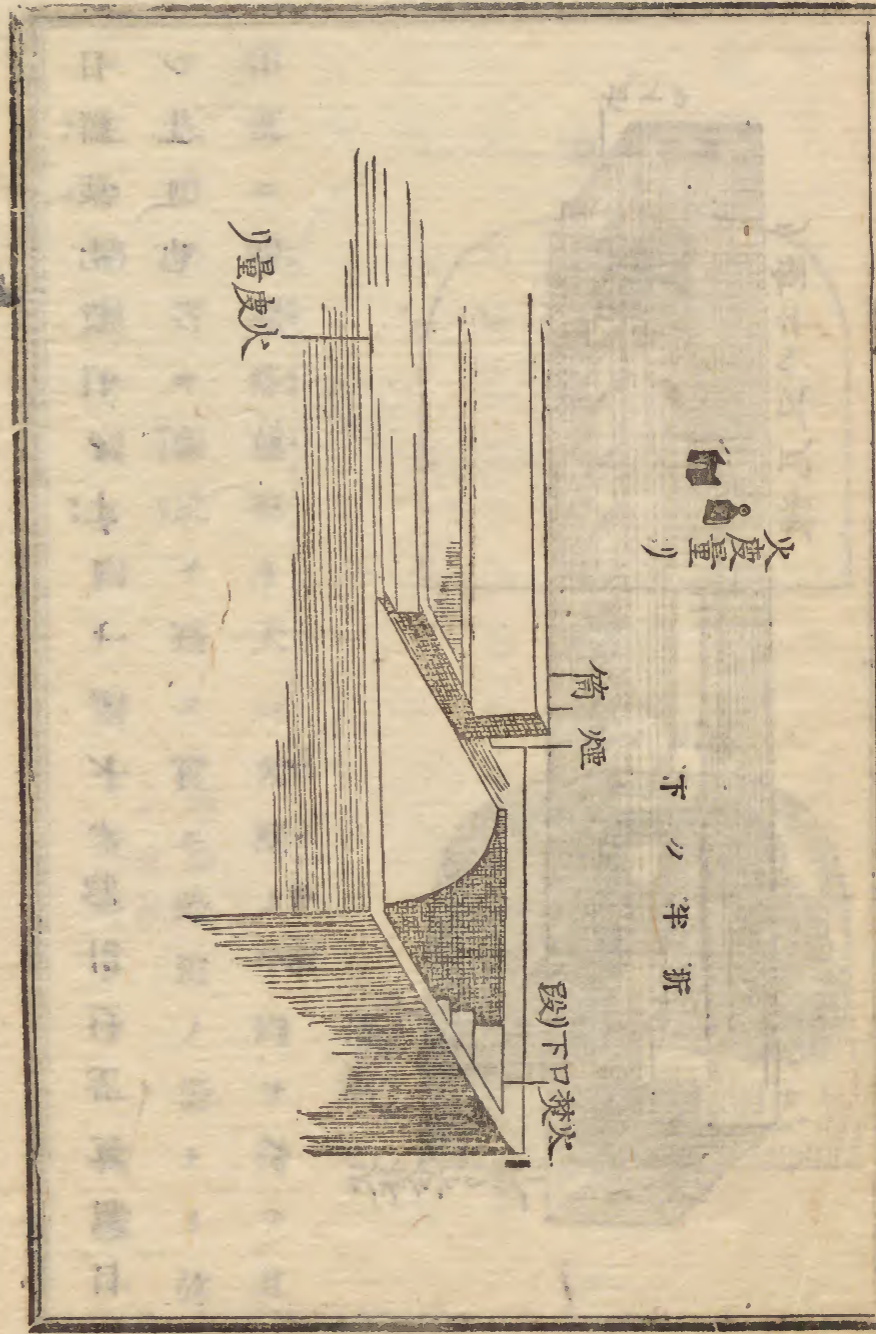
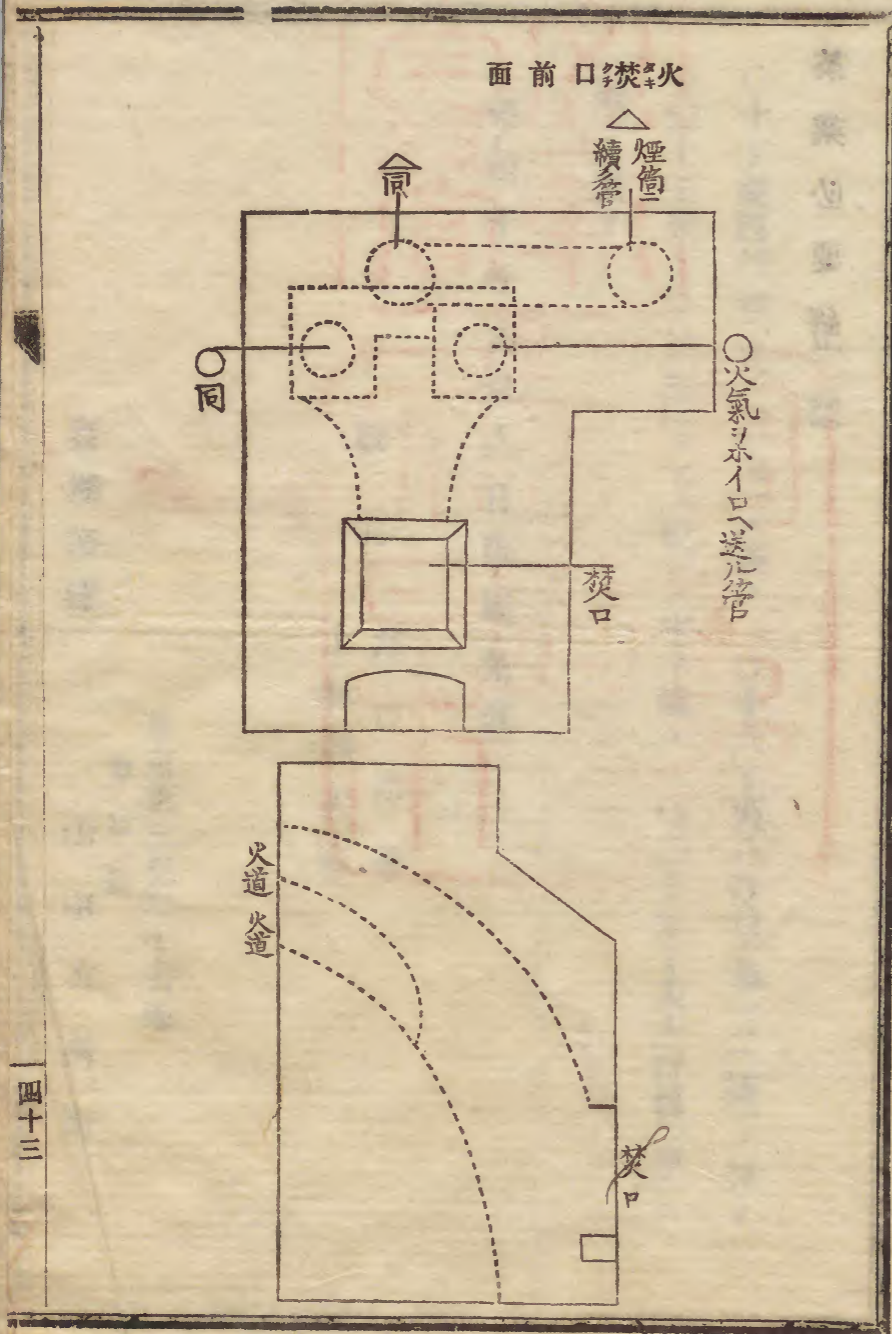
圖ノ面裏



日鮮葉七貫目ノ上リトスレハ惣計百零五貫目
 ノ上リ也



上ノ新





茶業必要終



正誤

○十丁裏四行目(夫)ハ(失)ノ誤リ ○十六丁裏八行目(難)ハ(雖)ノ誤リ
○三十丁裏十行目(出)ノ下(税)ノ字ヲ脱ス ○三十五丁表六行目(寮)ハ
(寮)ノ誤リ

明治十年九月六日版權免許

版主 江口高廉
上林熊次郎

賣捌書肆

東京芝三島町十番地
和泉屋
山中市兵衛

